

「東アジアからみた中国美術史学」

プログラム

日時： 2017年11月25日（土）午後2時～5時
会場： 北京師範大学後主楼 914

主催： 渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）
共催： 北京師範大学外国語学院、清華東亜文化講座
助成： 国際交流基金北京日本文化センター、鹿島美術財団

■ 開催経緯

公益財団法人渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）は、2014年から毎年、清華東亜文化講座のご協力をいただき、北京をはじめとする中国在住の日本文学や文化の研究者を対象としてSGRAチャイナフォーラムを開催しています（下記「過去3回のSGRAチャイナフォーラム」参照）。本年も、これまでの成果を踏まえながら、「東アジアにおける広域文化史」の可能性を探ります。日中同時通訳付き。

■ フォーラムの趣旨

本フォーラムでは、過去3回のフォーラムの論点をあらためて紹介するとともに、その成果を踏まえて「東アジアからみた中国美術史学」というテーマで開催する。

作品の持つ芸術性を編述し、それを取り巻く社会や歴史そして作品の「場」やコンテキストを明らかにすることによって作品の価値づけを行う美術史学は、近代的社会制度の中で歴史学と美学、文化財保存・保護に裏打ちされた学問体系として確立した。とりわけ中国美術史学の成立過程においては、前時代までに形成された古物の造形世界を、日本や欧米にて先立って成立した近代的「美術」観とその歴史叙述を継承しながらいかに近代的学問として体系化するか、そして大学と博物館という近代的制度のなかにいかに再編するかというジレンマに直面した。この歴史的転換と密接に連動しながら形成されたのが、中国美術研究をめぐる中国・日本・アメリカの「美術史家」たちと、それぞれの地域に形成された中国美術コレクションである。このような中国美術あるいは中国美術史が内包する時代と地域を越えた文化的多様性を検証することによって、大局的な東アジア広域文化史を理解する一助としたい。

14:00-14:10

総合司会：孫建軍（北京大学日本語文化学部）

開会挨拶：今西淳子（SGRA代表）

14:10-14:30

問題提起：林少陽（りん・しょうよう）

（東京大学大学院総合文化研究科）

江戸時代の中国絵画コレクション

—近代・中国学への架け橋—

塚本麿充（つかもと・まろみつ）

（東京大学東洋文化研究所）

14 世紀後半、元朝の崩壊と明朝の成立という中国での大きな社会的変動中で日本に大量に将来された宋元時代の絵画作品は、日本では足利将軍家などによって積極的に購入され、「東山御物」と呼ばれるコレクションが築き上げられることになった。本稿で扱うのは、「東山御物」の崩壊後から 20 世紀の近代美術史学の成立に至るまでの歴史である。

16 世紀に起きた足利将軍家の崩壊は、そのコレクションを各地に分散させ、全国の大名家はそれを継承する主体となっていった。1603 年の成立以来、約 250 年の長きにわたって日本を統治した徳川幕府は、全国に 300 以上あった藩から構成された巨大な政治機構であり、同じ武家政権としての足利将軍家の典礼を積極的に継承し、『君台観左右帳記』に記載されたような中国絵画をふくめた「唐物」を収集し、それを江戸と地方、藩と幕府、各家の間で交換・流通させ、さらには狩野派による広範な模写制作ネットワークが機能することによって、その文化的な権威を保っていった。本稿で扱うのは、足利義満によって分割された牧谿の「瀟湘八景図巻」伝来の歴史であり、これは江戸時代には諸藩に分蔵され、ある時は国元で、ある時は江戸藩邸に保管され、各家を象徴する「文物」となっていたのである。

その後、1867 年に徳川幕府が崩壊すると、それまでの「唐物」や「漢学」は、「中国美術史」や「中国学」と名前を変え、近代的な学制と博物館制度の中で新しい位置づけを得ていく。その具体的な様相を作品評価の変遷やその言説から考えてみたい。

14:30-15:10
【講演 1】

漢学と中国学のはざままで

—長尾雨山と近代日本の中国書画コレクション—

呉孟晋（くれ・もとゆき）

（京都国立博物館）

日本人による中国美術コレクションにとって、20世紀前半の明治・大正・昭和初期は、これまでの「古渡り」と称される将来品を圧倒する、いわゆる「新舶載」の名品がもたらされた転換期であった。その背景には辛亥革命に象徴される中国の政治的変動があったが、飛躍的に増加した人的往来、そしてそれともなう中国を対象とする学問体系の変化という要因も見逃せない。

江戸時代までの日本における「漢学」は儒学をもとにした、威信財としての書画を収集する理論的支柱であった。一方で明治時代以降の「中国学」は現地滞在をもとに膨大な文献や資料、作品を入手して中国の実像を理解しようとした。中国学者たちは中国書画に関心をもつ新興実業家たちに新知見を示し、収集の指南役をつとめたのである。

しかし、実際には漢学から中国学へ、古渡りから新舶載へ単線発展的に置き換わったわけではなかった。本稿で扱いたいのは、近代日本における中国書画収集の学術的背景にみられる「ゆらぎ」である。

具体的な事例として、本稿では1903年から14年まで上海に滞在した中国学者で書家の長尾雨山（1864-1942）を話題にしたい。藩士の家に生まれた雨山は中国に渡り、呉昌碩ら当時の文人たちと交流、帰国後は在野の書画鑑定家として活動し、京都大学教授の内藤湖南と好対照をなした。漢学と中国学、そして官と民の「はざま」に生きた長尾雨山の活動をとおして、近代日本の学知および中国との文化交流の一端を明らかにしてみたい。

15:10-15:50
【講演 2】

15:50-16:00

休憩

16:00-17:00
【討論】

進行： 王志松（北京師範大学）

討論： 趙京華（北京第二外国語学院文学院）

王中忱（清華大学中国文学科）

劉曉峰（清華大学歴史学科）

総括： 董炳月（中国社会科学院文学研究所）

講師略歴

■ 塚本麿充（つかもと・まろみつ）

1976年生まれ。東北大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。大和文華館、東京国立博物館を経て、2015年より東京大学東洋文化研究所准教授。専門は宋代を中心とする中国絵画史。著書に、『北宋絵画史の成立』（中央公論美術出版、2016年）、近年の論文に、「道宣律師像・元照律師像の絵画表現とその制作集団」（『國華』1458号、2017年）、「兩個“趙令穰”——《秋塘圖》與《湖庄清夏圖》接受的中日比較研究——」（『千年丹青國際學術研討會論文集』（上海書畫出版社、2015年）、「江戸時代所見之中國繪畫——狩野畫派的摹本製作與中國畫史研究」（『典藏古美術』第248期、2013年）、など。

■ 吳孟晋（くれ・もとゆき）

1976年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学。博士（学術）。2009年から京都国立博物館勤務。現在、学芸部主任研究員。専門は近現代をはじめとする中国絵画史。担当した主な展覧会は、『中国近代絵画と日本』展（2012年）、『国宝』展（2017年）など。最近の論文に、「展望の《假山石》について：中国現代彫刻における「仮（偽る）」という戦略」（『海賊史観からみた世界史の再構築』思文閣出版、2017年）、「中華民国期の絵画における「風俗」へのまなざし」（『風俗絵画の文化学3』思文閣出版、2014年）、「辛亥革命と京都国立博物館の中国絵画：上野コレクションと須磨コレクションについて」（『美術フォーラム21』第26号、2012年）、など。

■ 林少陽（りん・しょうよう）

1963年10月中国広東省生まれ。1979年9月に廈門（アモイ）大学入学。1999年春留学で来日、大阪大学研究生、東京大学博士課程、東京大学助手等を経て現在東京大学教養学部教授。研究関心は、19世紀前後以来の日本と中国の思想史・文学史。著書に『「修辞」という思想：章炳麟と漢字圏の言語論的批評理論』（白澤社、2009年）、『「文」與日本学術思想——漢字圏・1700-1990』（中央編訳出版社、2012年）、『士、革命與「文」：章太炎與清季復古的新文化運動1903-1911』（上海人民出版社、近刊）、など。

○同時通訳（日本語⇄中国語）：丁莉（北京大学）、宋剛（北京外国語大学）

SGRAとは

SGRAは、世界各国から渡日し長い留學生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。詳細はホームページ（www.aisf.or.jp/sgra/）をご覧ください。

SGRAかわらばん無料購読のお誘い

SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。